



# ハントン通信

いつまで続くか  
不定期発行  
No. 014

16-90177

## サモアの世界と障がい

南太平洋の島でサモアという独立国があります。その国に暮らす人から興味深い話が聞きました。

サモアでは台風が来ると家が壊れてしまうので、家を分解して風雨をやり過ごします。もともと壁が無い家もあります。そういう家で暮らし隣近所とコミュニケーションをとっているのです、お腹がすいた人が他人の家の台所に勝手に入ってきて盗み喰いしても咎められることはありません。盗られた側も「お腹がすいているのだから、食べればいい」で終わりです。自然と共に暮らすサモアの人たちは、心があたたかい。

そんなサモアにも障がいがある人は居ます。でも日本のように「障がい者」とひとくくりにしてしないでその人の個性として考えます。

たとえば足に障がいがあったり歩き方がヘンになる。それを見て笑う人がいます。笑われた側はうれしくなって今度は走って見せる。するとまた笑う。

障がいを隠したりさげすんだり、気を使ったりして生きていない。特別な配慮はしないけれど排除もしないといえます。

サモアの子育ては、3歳までは溺愛するけれど、4歳になると親は子に用事や仕事を命じます。子どもによって上手下手があってもその子ができる用事をやるのです。

障がいがある人であってもその人に出来る事が仕事になり役割になります。「できること」さえやっていけば、その家族に在る権利が認められ、自己肯定感が満たされて大人になっていきます。

家族の絆がとて大切なサモアは、家や村のしきたりをとて大切にします。

生まれた子に名前を付けるのはその家族の中の最年長者であるとか、薪を拾ってくるのは子どもの仕事であるとか、料理を作るのは誰かというのが厳格に決まっています。たとえば敷物(サモアではとても大切なもので結婚式などではお金として結納の品になったりします)は女性が編むもので男性が編んではいけません。

その仕事はその人しかできないからそれぞれが家族の中で自分の居場所があり、役割・仕事があるのです。

この話を聞いて、利用者さんの暮らしのヒントをもらえたような気がしました。

日本では他者の役割をお金で買えてしまいます。ここで家族関係・人間関係に

ヒズミがうまれるのかもしれない。文明が発達すると便利な反面人間関係が希薄になっていってしまううし、コンビニがあるから当面は困ることがない。そうして居場所や役割がいまいいになってしまふことで生き甲斐を感じる事が難しくなってしまうのかもしれない。

訪問看護は文明制度にのった支援ですが、制度上の支援だけではなく、隣近所などや地元への参加などを活用した暮らしを、地域の中で作っていくことがその人の生活にとって大切なことです。 「役割」が生きる希望になるのは、私たちも同じことですが、忘れてしまいがちなことだと思えます。



サモアの家と家族 著作権者: Plenz さん(ドイツ)  
<[https://ja.wikipedia.org/wiki/ サモア](https://ja.wikipedia.org/wiki/サモア)>



グループホームで10月31日にハロウィンレクをしました！  
お菓子作りやフェイスペインティングで盛り上がります。  
ホーム入居者以外の方も参加して盛り上がりました！

吹田市役所で、ハントンカレンダーとその作品が展示され、たくさんの方に見て頂けました。

